

『京阪神聯合保育會雑誌』にみられる 京阪神地区における明治後期の唱歌遊戯の特徴

堀 江 遥

(本講座大学院博士課程前期在学)

The Characteristic of Singing-Dancing at Keihanshin Area Seen in “Keihanshin-Rengo-Hoikukai-Zasshi” in the Later Meiji Period

Haruka HORIE

1. はじめに

明治期に幼児教育が普及して以来、唱歌と遊戯は、幼児教育において欠かすことのできない重要な保育内容として位置付けられてきた。そして、唱歌を伴って身体を動かす唱歌遊戯は、我が国の音楽教育創設の中心人物である伊澤修二がその教育的意義について述べ、いくつか実践を試みたことに始まった。その後、我が国初の公立幼稚園であった東京女子師範学校附属幼稚園では、欧米の翻訳に基づいた唱歌遊戯の実践が行われ、次第に我が国の教育者の手によって作品が創作され始めるようになった。そうして唱歌遊戯は、当時の社会情勢の変化等を反映しながら、幼稚園において欠かすことのできない、主要な保育項目の1つとして発展していったのである。

唱歌遊戯は、幼児の身体機能の発達を促し、人格を陶冶する役割をもつことから、保育や体育の分野と密接に関わるものであるが、唱歌を伴った身体活動であるという特質を考えると、音楽教育の観点からも注目すべき分野であると考えられる。特に、我が国の唱歌教育および音楽教育の創始期であった明治期には、主要な保育項目の1つとして著しく発展し、当時の教育者たちによる唱歌遊戯に関する文献・記述も多数みられる。

唱歌遊戯に関する先行研究としては、江崎(1982)¹⁾、金本(1986)²⁾、水野(1991)³⁾、今井(1992)⁴⁾、名須川(2002)⁵⁾らによるものが挙げられる。唱歌遊戯に関しては、これまでもさまざまな時代区分や人物に焦点があてられ、研究が行われているが、その分析の対象は当時の著書が主となっており、雑誌に着目して唱歌遊戯を探った先行研究はいまだないと言える。雑誌は、定期的に刊行されるという点や、複数の筆者による記事が同時に掲載されるなどの点において、情報量の多さや速報性に優れており、印刷資料では、著書と並ぶ重要な情報源ということができよう。したがって、明治期の教育雑誌を検討することによって、当時の唱歌遊戯の状況を詳細に把握することができると思われる。

本稿では、当時の幼児教育雑誌である『京阪神聯合保育會雑誌』^{6) 7) 8)}にみられる、唱歌や遊戯に関する記述を検討することによって、明治30年代から40年代にかけての京阪神地区における唱歌遊戯の特徴を明らかにすることを研究の目的とする。

2. 『京阪神聯合保育會雑誌』の概要

明治20年代の我が国では、幼稚園の急激な増加に伴い、各地の幼稚園が相互に連携・協力して幼児教育の向上を目指すための、組織的な保育研究団体が現れ始めた。このような「保育会」として最初に登場したのが、明治22年に結成された京都市保育會である。京都市保育會は、幼児教育における諸問題に関する研究・議論を積極的に行い、数多くの、しかも長期にわたる講習会を開催するなど、近畿地方の幼児教育を牽引する存在であった。明治20年代末に入ると、大阪市および神戸市においても保育会結成の機運が高まり、明治30年、大阪市保育會と神戸市保育會が相次いで結成された。それを契機に、京都市・

大阪市・神戸市からそれぞれの保育会代表が集まり、近畿地方における保育研究団体創設のための協議がなされ、同年、京阪神聯合保育会が創設されたのである。以後この会は、保育団体の中でも最も活躍し、注目された団体の1つとなった⁹⁾。

『京阪神聯合保育会雑誌』はその機関誌であり、同保育会が結成された翌年、すなわち明治31年7月に創刊され、原則として年2回ずつ発行された。昭和3年以降は『関西聯合保育会雑誌』と改題し、年1回ずつの発行となった¹⁰⁾。同雑誌の内容は、以下の4つに分類することができる(表1)。

表1 『京阪神聯合保育会雑誌』の内容分類

論説	三市連合会や各市保育会で行われた演説や、他の幼児教育雑誌の記事の転用などを主な内容とする。
記事 彙報	三市連合会、および各市保育会の記録。活動報告や、議決、議論の記録などが掲載される。
雑録	幼児教育に関する短い記事や、各種の調査報告など、保育事業に関する資料からなる。

同雑誌には、三市聯合保育会大会の報告を中心としながら、各保育会で行われた講演の内容や協議、保育の現場における課題研究や新しい試み等が詳細に掲載されている。これらのことから、京阪神地区の幼稚園が、積極的に新しい試みを取り入れ、実践し、協議し合っていたことがうかがえる。

このように『京阪神聯合保育会雑誌』は、現場の保母たちを対象として、保育の実践に対する情報提示、意見交換を主体とした形で編纂されたものであり、各時代の幼児教育の動向を知る上で役に立つだけでなく、現場の教育者たちが、何を思い、何を行ったのかについて、実践的な見地から探ることができる点で、非常に有意義な史料であると言える。

なお、本稿では、対象を明治期に出版されたものに絞り、第1号(明治31年)から第29号(明治45年)までを扱うこととする。以下では、同雑誌における唱歌遊戯に関する記述について、遊戯の目的および意義、遊戯の指導方法、唱歌遊戯作品、当時の実践に対する批判、の4観点から検討を行う。

3. 『京阪神聯合保育会雑誌』にみられる唱歌遊戯

(1) 研究対象とした遊戯の種類

玩具を用いた遊戯や模倣遊戯など、「遊戯」という言葉が示す内容や種類は非常に幅広いといえるが、同雑誌では、遊戯は大きく「共同遊戯」と「随意遊戯」の2種類に分けて記述されている¹¹⁾。それぞれの遊戯を行う場所、意義、方法、指導上の留意点について同雑誌の記述をまとめたものが表2である。

本稿で対象とする「唱歌遊戯」とは、唱歌を歌いながら行う遊戯のことを指す。当時の文献史料においては、そのような遊戯を直接「唱歌遊戯」と称している場合もあれば、別称が用いられている場合もある。本雑誌における「共同遊戯」は、その定義から、唱歌遊戯と同義であると思えることができると考えられるため、共同遊戯として記述されているものも、唱歌遊戯として検討に含めることとする。

(2) 遊戯の目的および意義

同雑誌では、幼児教育全体の目的として、健全な身体の発達、人格の養成、善良な習慣の育成が挙げられている。それらの目的はすべて、子どもが本来もっている「遊戯性」を利用することによって達成される、としている。つまり、遊戯は幼児教育の中心的な項目であると同時に、幼児教育の目的を達成するための手段として考えられていたのである。

同雑誌では遊戯に関する記述が多数みられるが、それらにみられる遊戯の目的について整理すると、次のようにまとめることができよう¹²⁾。

- ①子どもの精神を涵養し、身体の発達に資すること。
- ②公德(誠実、正しい行為、温和、礼儀など)を学ばせること。
- ③善良な習慣をつくること。
- ④子どもの個性を発達させること。

表2 共同遊戯と随意遊戯

	共同遊戯	随意遊戯
概要	唱歌を歌いながら、その意味内容を遊戯動作として表出するもの。	子どもそれぞれに、自由に（随意に）運動させるもの。
意義	子どもがその意味を遊戯の動作と連結させて理解し、共感することによって、心情を快活にし、身体を健全なものにする。	子どもに自然と親しませることによって、自然の良性を発揮させ、子どもの自発的な活動を助長する。
方法	歌曲に合わせて各種の運動をさせる。主に屋内の遊戯場で行われることが多く、通常、風琴あるいは洋琴を用いて行う。	屋外の遊園などで、子どもに任意に遊ばせる。自然的、地理的環境に恵まれた設備が備わっていることが前提である。
指導の留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・遊戯的性質を失わないようにする。 ・子どもがその歌の意味と遊戯の意味を連結して理解できるようにする。 ・同一の唱歌でも、子どもの年齢と発達に応じて形式を変化させる。 ・形式ばかりにこだわって、遊戯が苦痛に感じてしまわないように注意する。 ・子どもの自然的動作を見逃さない。 ・規律で縛り過ぎない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊園などの設備を整える。 ・怪我をするような遊びはさせない。 ・他人を傷つける行為や、ものを壊すような行為はさせない。 ・子どもを俗悪なものに近づけない。 ・戸外で行う時は、十分に自然と親しませる。

このように、遊戯の目的は、智・徳・体の発達という幼児教育そのものの目的と、非常に密接な関係をもっていることが分かる。このことは、明治期の幼児教育においても、現代と同じように、遊戯が重要な役割を果たすものとして考えられていたことを指し示すものである。

さらに、これらの目的をふまえ、遊戯が実際に子どもに与える意義として、次のように述べられている¹³⁾。

①心身の発達

さまざまな興味関心の基礎を築き、心情を陶冶する。また、身体各部分の運動をさせ、身体を均等に発達させる。視覚、聴覚、触覚などの五感の練習にも効果がある。

②社会性の教育

同じ年頃の友達と交遊することによって、自己と他人との関係、社交の方法、道徳的行為、および非道徳的行為の結果などを学ぶ。私利私欲のためではなく、他人のために自分は我慢する、という姿勢を養う。規律を守ることによる、勤労に対する予備的修練ともいえる。

③知力の発達

遊戯を通して、思考力、判断力、応用力などを発達させる。科学的事項、人倫道徳の主旨など、いろいろな事項を、講義の代わりに遊戯を通して伝える。

④個性の伸長

他人との関わりを通して、個性を伸長させる。また、指導者にとっても、子ども一人ひとりの個性を観察する絶好の機会となる。

(3) 遊戯の指導方法

明治32年の文部省令第32号では、保育項目は遊戯、唱歌、談話および手技の4項目と定められている¹⁴⁾。その中でも遊戯は、他の保育項目と比較しても特に重要視され、現場において実際に割かれる保育時間も長かったようである¹⁵⁾。同雑誌には、遊戯の意義を十分に発揮させるため、教育者たちによって遊戯の教授方法について議論、工夫の記録が残されている^{16) 17) 18)}。以下に、同雑誌において取り上げられていた遊戯の指導法に関する記述をまとめた。

①遊戯の選択および条件

保育者は、遊戯を選択し、子どもに与える段階にも細心の注意を払うべきである。遊戯の選定においては、生理上、心理上ともに、その遊戯の真の意味を十分に理解したうえで選ばなければならない。唱歌は遊戯に興味を添えるためだけのものではなく、その観念が子どもにとって有益なものであるこ

とが望ましい。したがって、以下の条件を満たすような遊戯を選択する必要がある。

- ・子どもの身体にとって適切な動作のもの
- ・子どもの理解力に適切で、興味をもちやすい内容のもの
- ・歌詞は談話体もしくは普通文体で、難しくないもの
- ・リズムや音域が適切で、快活な調子をもつもの

②設備

遊戯に必要な道具（玩具）は必ず揃えるべきであり、幼稚園の屋内外に適当な遊戯場、および遊園を設置することが必要である。遊戯場を設置することが難しくても、天気の良い日には近場の公園に出るなど、積極的に屋外で遊戯を行うようにする。

③実施上の留意点

遊戯を教える際には、ただ動作だけでなく、その遊戯に含まれる観念や精神も教えるようにする。子どもが遊戯内容と動作を関連付けて考えることによって、その目的が達成される。したがって、遊戯を練習する際には、唱歌から始め、その内容をよく理解咀嚼した上で動作の練習に入ることが望ましい。また、教師は子どもとともに戯れ、遊び、よく観察し、導くようにすべきである。その際、遊戯の実施を通して一定の秩序をもたせることは、1つの事柄を学習する上でも効率的で、規律を守る習慣の育成につながる。

このように、同雑誌では、唱歌に含まれる観念と、実際の遊戯動作の一致が重要視されていることが分かる。子どもの特性に合致する遊戯を与え、正しく指導することによって、前項で述べたような遊戯の目的、意義が達成されるとしている。

(4) 唱歌遊戯作品

京阪神聯合保育會では、京都市、大阪市、神戸市の三市による遊戯交換が行われていた。同雑誌における三市聯合保育會の記事には、ほぼ毎号、各市から提出された遊戯作品が掲載されており、常に新しい遊戯作品を考案し、積極的に情報交換を行っていたことが読み取れる。また、各市保育會の彙報には、聯合保育會に提出する遊戯の選考、議論の記録が残されている。

表3は、同雑誌の三市聯合保育會記事、または各市保育會彙報に掲載されていた遊戯作品の一覧である。空白は、遊戯タイトルの記述がみられなかったことを示す。なお、これらの遊戯作品は、記事や彙報に掲載された各市保育會によるものであり、それぞれの市における区町村、または幼稚園ごとに記述のあった遊戯作品は省略している。

表3 『京阪神聯合保育會雑誌』第1号から第19号に掲載された、保育會による唱歌遊戯作品一覧

	京都市保育會	大阪市保育會	神戸市保育會
第1号(明31)	体操的遊戯	忠魂義膽	
第2号(明32)	暁の雀 友どちきたれ	舌切雀 春	果物売 小虫 渡雁 紅葉見物 農夫 月見
第3号(明32)	桃太郎(第一)	嵐山 子供遊び	つぼめて開け
第4号(明33)	桃太郎(其四,五,六)	時計	一,二,三,四,まるくなりて 桶屋
第5号(明33)	春風 兵士	蟻 海國	輪遊
第8号(明35)	蜻蛉 行進遊戯 桃太郎(第三)	遊び事 潜り遊び	
第9号(明36)			兎と亀 花さん 大寒小寒
第10号(明36)		朝顔 富士の山 蝶と金魚 トンネル門	
第11号(明36)	大なる馬 鬼ごと	朝顔 門 大阪名所	
第12号(明37)	鶏 調練	ポート 兎狩	
第14号(明38)		菊楓 オーさむこさむ 軍隊あそび すずめ おちば	幼稚園 子供猫 手毬 金魚

第15号(明38)	ペス 行進 萬歳 その他3種	てふてふ来い 円形行進 かごめ 摘草 兵隊遊び お池の金魚	
第16号(明38)		遊び事 進行遊戯 秋の庭 風 体操遊び 秋が来た	
第17号(明39)	お日様 とんぼ お馬	楽隊遊び シャボンたま 数え歌 毬遊び 花見	雀と蝶々 雪遊び
第18号(明40)		虫の楽隊 お月さま 日と月	お日さま 豊年 ベビーダンス ポロネード 訓練 子供遊び 神戸名所 お馬ドードー 毬カクシ 朝顔 蝸牛 兎 カゴメ
第19号(明40)	電車 ままごと	砂遊び 野遊び 鬼事 天神様の庭 春遊び 家づくり 蛙	
第21号(明41)	風船 蛍 船	端午 鬼遊び お池の亀 子供遊び	蟹 牛 船 鳩 亀
第22号(明42)		秋の田 兎 雁 模倣行進 ぼちとたま 菊	
第23号(明42)	雨風 鶯 笛太鼓	模倣運動 雁	蟬 蜂 電車遊
第25号(明43)	かたつむり 子猫 輪つくり	拍子行進 幼児の園芸	ひばり 蟻
第27号(明44)	汽車 兵隊ごと	鶏 兎	名乗り遊び 時計 まり(第一, 第二)
第29号(明45)	花摘み 進め 子供の遊び 狐	電車と自動車 色合わせ 盲目鬼事	頭字遊 おだんご
計	42	67	51

これらの遊戯作品のうち、明治38年の第16号以降に掲載されていたものは、同雑誌に遊戯唱歌の歌詞、および譜例、遊戯動作の解説が載っているものが多く、その具体に迫ることができる。楽譜が掲載されているものは58作品あり、そのうち解説が掲載されていたものは20作品であった。それらを検討した結果、以下のような特徴が明らかになった。

- ・遊戯の動作は、歌詞の内容を写實的に動作で表現するものが多くみられた。また、子どもたちが集団で行うものが多くみられ、個人で行うものは1つのみであった。集団で行うもののうち、隊形は、子どもたちを円形にさせるものと列に並ばせるものの2種類があったが、円の中に数人の子どもを入れて行うタイプのものは、ほとんどが遊びの性質を強くもつものであった。表4は、集団で行う19作品の動作分類を示したものである。
- ・遊戯唱歌の調性はへ長調が最も多く、次いでニ長調、ト長調、ハ長調となっており、短調のものはみられなかった。
- ・拍子は4分の2拍子が圧倒的に多く、3拍子系は4分の3拍子が1作品みられたのみであった。
- ・歌唱音域は、ほとんどの作品で8度、もしくは9度であった。最高音で最も多かったのは2点ニで、最低音で最も多かったのは1点ハであった。

表4 唱歌遊戯作品の動作分類

		写實的	遊び的	計
円	全員	8	0	8
	中に人	1	6	7
	列	3	1	4
	計	12	7	19

(5) 当時の実践に対する批判

同雑誌では、当時の唱歌遊戯実践に対する批判も述べられている¹⁹⁾。その内容は、遊戯に伴う唱歌に関

するものと、遊戯の動作に関するもの、指導法に関するものに大別できる。これらの批判は、動作や歌、内容において、より子どもの特性に合致したものを求めるものであるということが出来る。

①唱歌に関して

唱歌の歌詞が古雅で、子どもが意味を理解するのは難しい。意味の上でも、子どもの経験からは程遠いものであるため、子どもの心情陶冶は難しい。つまり、遊戯と唱歌が一致していない。

②動作に関して

唱歌遊戯は、遊戯の中でも身体動作の割合が少ない。また、複雑な動作や緩慢な動作が多い。

③指導法に関して

保育者による風琴の伴奏に合わせて遊戯を行うことが多いが、子どもの本能的な自由な動きを、風琴の音が抑制してしまっている。また、言語や動作の上で、子どもにとって困難なものを強いている。

5. 考察

『京阪神聯合保育會雑誌』にみられる唱歌遊戯に関する記述を検討した結果、遊戯は、心身の発達や社会性の育成などに効果があるものとして、幼児教育における主要な活動として重要視されていたことが改めて明らかになった。また、さまざまな種類がある遊戯の中でも、唱歌を伴う遊戯は「共同遊戯」として特に盛んに研究、実践が行われていた。唱歌と遊戯の合致による教育的意義の拡大を企図し、唱歌と遊戯動作の関連、歌詞内容、ことばやリズム、動作の活発性など、子どもの特性に適した教材を選択する必要性について、複数の記述で指摘されていた。また、実際に三市で考案された遊戯作品をみると、長調のものや2拍子系のものが多く、これらの理論は作品として反映されていたということが出来る。

しかし一方で、そのような基準を完全に備えた遊戯作品は少ないという指摘や、子どもの自発性をかえって抑制してしまうのではという指摘もみられたことから、当時掲げられていた理想と、現場の保育実態は必ずしも整合していなかったといえる。

また、今回概観した15年間の記述において、徐々にではあるが、随意遊戯から共同遊戯への移行、恩物からの脱却など、価値観の変化をみてとることができた。このことは、同雑誌が創刊された頃に存在していた、フレーベル主義に対する絶対的な信仰に対して、明治の終わりごろから多少なりとも疑問が生じてきたことを示しているといえる。しかし、明治期においては、フレーベル主義が幼児教育の理想とみなされていることに変わりはない。我が国の現状をふまえ、幼児教育の目的を達成するためのよりよい方法を模索し、努力していく過程を同雑誌は示している。

このように、京阪神地区の幼稚園は、遊戯を含め幼児教育に関するさまざまな事項について、お互いに発表し、協議し合う機会に恵まれていた。この積極性と情報の共有によって、京阪神地区の幼稚園は、関東地方のフレーベル会と並ぶ勢力として、明治期の我が国の幼児教育を牽引していった。したがって、同雑誌にみられる唱歌遊戯の特徴は、我が国における明治期全体の唱歌遊戯の特徴と深く関連しているといえる。

6. おわりに

本稿では、明治期の幼児教育雑誌として『京阪神聯合保育會雑誌』を扱ったが、今後は、同じく明治期にフレーベル会から発刊された幼児教育雑誌である『婦人と子ども（幼児の教育）』にも着目し、東京女子師範学校附属幼稚園を中心とした関東地方における唱歌遊戯実践にも目を向け、明治期の唱歌遊戯の特徴をより詳しくみていく必要があると考える。

註

- 1) 江崎公子「Calisthenic Song について—明治初期の唱歌遊戯研究序説—」『国立音楽大学研究紀要』第17号 1982 pp.37-54
- 2) 金本佳世「幼児音楽教育創始期における『唱歌』及び『唱歌遊戯』についての一考察」『武蔵野音楽大学研究紀要』第18号 1986 pp.1-18
- 3) 水野恵子「昭和初期における唱歌遊戯教育について」『愛知県立大学文学部論集，児童教育科学編』

40号 1991 pp.47-69

- 4) 今井民子 笹森建英「日本の音楽教育に於ける身体表現のあり方—明治期の唱歌遊戯を中心として：舞踊と音楽の関係についての考察—」『弘前大学教育学部紀要』67号 1992 pp.45-63
- 5) 名須川知子『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房 2004
- 6) 京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』第1号～第10号 京阪神聯合保育會 1898-1903(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983)
- 7) 京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』第11号～第20号 京阪神聯合保育會 1903-1907(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) II 臨川書店 1983)
- 8) 京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』第21号～第29号 京阪神聯合保育會 1908-1912(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) III 臨川書店 1983)
- 9) 日本保育学会『日本幼児保育史』第2巻 フレーベル館 1968 pp.168-173
- 10) 水野浩志「京阪神聯合保育會雜誌(1) —創刊当初の内容—」『幼児の教育』第79巻 第5号 日本幼稚園協会 1980
- 11) 東基吉「幼稚園學説及現今の保育法(承前)」『京阪神聯合保育會雜誌』第9号 京阪神聯合保育會 1903(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983) pp.1-18
- 12) 不詳「遊戯と教育」『京阪神聯合保育會雜誌』第2号 京阪神聯合保育會 1899(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983) pp.58-59
- 13) 前掲書10 pp.1-18
- 14) 文部省「文部省令第32号」『京阪神聯合保育會雜誌』第3号 京阪神聯合保育會 1899(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983) p.43
- 15) 京阪神聯合保育會「第二回三市聯合保育會記事」『京阪神聯合保育會雜誌』第1号 京阪神聯合保育會 1898(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983) p.38
- 16) 清水誠吾「幼稚園に就きて」『京阪神聯合保育會雜誌』第2号 京阪神聯合保育會 1899(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983) pp.3-6
- 17) 樋口梓溪「リズムと唱歌及び遊戯」『京阪神聯合保育會雜誌』第5号 京阪神聯合保育會 1900(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983) pp.1-4
- 18) 東京女子師範学校附属幼稚園「女子高等師範学校附属幼稚園保育要項」『京阪神聯合保育會雜誌』第17号 京阪神聯合保育會 1906(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) II 臨川書店 1983) pp.33-46
- 19) 樋口長市「幼稚園唱歌につきて疑のふし、」『京阪神聯合保育會雜誌』第4号 京阪神聯合保育會 1900(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983) pp.1-11

主要引用参考文献および第一次史料

- ・ 秋葉尋子「明治初期における唱歌遊戯について」『日本体育学会大会号』第26号 1975 p.122
- ・ 秋山麻実「保育をめぐる『声』とジェンダー—『京阪神聯合保育會雜誌』をてがかりに—」『山梨大学教育人間科学部紀要』第9号 2007 pp.208-216
- ・ 江崎公子「Calisthenic Song について—明治初期の唱歌遊戯研究序説—」『国立音楽大学研究紀要』第17号 1982 pp.37-54
- ・ 今井民子 笹森建英「日本の音楽教育に於ける身体表現のあり方—明治期の唱歌遊戯を中心として：舞踊と音楽の関係についての考察—」『弘前大学教育学部紀要』第67号 1992 pp.45-63
- ・ 金本佳世「幼児の音楽教材に関する一考察—東基吉の唱歌遊戯論と、滝廉太郎、東クメ編『幼稚園唱歌』を中心として—」『武蔵野音楽大学研究紀要』第20号 1988 pp.1-16
- ・ 金本佳世「幼児音楽教育創始期における『唱歌』及び『唱歌遊戯』についての一考察」『武蔵野音楽大学研究紀要』第18号 1986 pp.1-18
- ・ 京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』第1号～第10号 京阪神聯合保育會 1898-1903(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版) I 臨川書店 1983)
- ・ 京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』第11号～第20号 京阪神聯合保育會 1903-1907

- (京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版)Ⅱ 臨川書店 1983)
- ・京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』第21号～第29号 京阪神聯合保育會 1908-1912
(京阪神聯合保育會編『京阪神聯合保育會雜誌』(復刻版)Ⅲ 臨川書店 1983)
 - ・輿水はる海 松本千代栄「明治期遊戯の一考察：白井規矩郎研究：歴史的研究」『日本体育学会大会号』第23号 1972 p.24
 - ・水野浩志「京阪神聯合保育會雜誌(1)－創刊当初の内容－」日本幼稚園協会『幼児の教育』第79号(5) 1980 pp.58-63
 - ・水野浩志「京阪神聯合保育會雜誌(2)－時代的な内容の変遷－」日本幼稚園協会『幼児の教育』第79号(6) 1980 pp.14-21
 - ・水野恵子「昭和初期における唱歌遊戯教育について」『愛知県立大学文学部論集, 児童教育科学編』40号 1991 pp.47-69
 - ・名須川知子『唱歌遊戯作品における身体表現の変遷』風間書房 2004
 - ・日本保育学会『日本幼児保育史』第二卷 フレーベル館 1968
 - ・桜井智恵子「『京阪神連合保育會雜誌』にみられる子ども観－1910年代における保母たちの『自由保育』と『自治』－」『日本保育学会大会研究論文集』第49号 1996 pp.24-25